

谷省吾先生『神道原論』の成立

秦

昌

弘

谷省吾先生『神道原論』の成立

秦 昌 弘

—

谷省吾先生の多くの著書のなかでも代表的なものである『神道原論』⁽¹⁾は、「神道の信仰・思想の核心に存すると思ふものをあげて論述」⁽²⁾され、神道の倫理性を古典と歴史に即して明らかにされたものである。また、神職課程の「神道神学」の教科書として昭和四十六年から平成五年までの長いあいだ用いられ、自ずと皇學館大学の「神道神学」を示していたのであった。⁽³⁾その内容は次のように、十編の論文と二編の資料紹介で構成されている。

序説

第一章 神道の課題 … (1)

第二章 神道と神話 … (2)

前篇 神道の根本理念

第一章 天地初発 … (3)

谷省吾先生『神道原論』の成立(秦)

第二章	修理固成	…	(4)
第三章	光華明彩	…	(5)
第四章	清々	…	(6)
第五章	天壤無窮	…	(7)
後篇	神道的生の核心		
第一章	正直	…	(8)
第二章	留魂	…	(9)
第三章	いのち	…	(10)

附録

- その一 若林強斎『神道大意』
- その二 鈴木重胤『林欣二伴臣生涯之心得』・『養心神訣』

各編は学術雑誌等に発表された論文をもとに、さらに修正、増補したものであることが「あとがき」に記されているが、元々それらの論文は、「神道神学」の講義ノートをもとにされたものであったことが、先生が皇學館での研究を振り返られた「皇學館大学と私の神道研究」⁴で述べられている。

そのような経過を経て成立した『神道原論』各章の基本となった論文は、次の通りである。数字は前掲の数字と対応する。

序説

(1) …… 伝統は改変してよいのか

― 戦後の神道論二三に対する意見 ―

「神道宗教」 三十七号

昭和三十九年十月

(2) …… 日本神話と神道

神道の立場からする神代史理解の問題

「歴史教育」 十四の四

昭和四十一年四月

前篇

(3) …… 天地初発の意義

「皇學館大学紀要」 第三輯

昭和四十年三月

(4) …… 「修理固成」考

「皇學館大学紀要」 第五輯

昭和四十二年二月

(5) …… 書き下ろし

(6) …「すがすがし」考

— 神道的境地の表現 —

「神道史研究」 十の六

昭和三十七年十一月

(7) …書き下ろし

後篇

(8) …神道における教

— 特に正直について —

「神道宗教」 四十五号

昭和四十一年十一月

(9) …留魂の思想とその顕現

「皇學館論叢」 四の一

昭和四十六年二月

日之少宮の伝の論理

— その神学的意義 —

「神道宗教」 三十三号

昭和三十八年十一月

(10) …神道における「いのち」

— 特にその連続性について —

高原先生喜寿記念『皇学論集』 昭和四十四年十月

附録 若林強斎の神道大意二種

「皇學館論叢」創刊号 昭和四十三年四月

林欣二伴臣生涯之心得・養心神訣

鈴木重胤先生百年祭記念会刊 昭和三十八年十月

なかでも前篇第四章の「清々」は、「神道史研究」の昭和三十七年十一月号に掲載された「すがすがし」考―神道の境地の表現―を基本にしたものであるが、『神道原論』を構成することとなる論文のなかで、最初に発表されたものである。

その「すがすがし」考は、皇學館大学が再興された年の発表であること、さらには、谷先生が學術論文を控えられていた時期から、再びその取り組みを始められた最初のものなのである。先生の学問を確認していくうえで見逃してはならないものであり、『神道原論』の成立にも深くかわるこことなるのである。

二

谷先生は、昭和十八年に東京帝国大学文学部国史学科に「鈴木重胤の研究」を提出され卒業されている。先生は東大

谷省吾先生『神道原論』の成立（秦）

入学以前の旧制浪速高等学校在学時に、垂加神道の精神世界に大きな魅力と関心を抱かれ、その研究を志されている。⁽⁵⁾ 大学での学問については、「退職記念講義」⁽⁶⁾のなかで、神道を深めていくには、「もつと根本的に日本の思想、乃至は神道の根幹に迫るためには記紀の研究―古事記・日本書紀の研究に向はねばならない」と考えられ、「自分自身が古事記・日本書紀に直接はひつてゆくと同時に、その伝承・研究の歴史をしつかりと学びたい」⁽⁷⁾との強い思いから、日本書紀と取り組んだ国学者の鈴木重胤を卒業論文で取り上げられたのであった。

東大卒業後は、海軍予備学生を経て和歌山県富田で終戦を迎えられ、復員後は療養生活が続き、研究の再開は昭和二十五年四月の「温故会と嚶々筆語」〔藝林〕一の一を待たなければならなかった。その後、

「自然とカムナガラ」〔神道史研究〕一の一・二 昭和二十八年一・四月

「大國隆正と鈴木重胤―学統辯論をめぐることも―」〔日本歴史〕六十 昭和二十八年五月

「造化者鬼神之迹―鬼神新論雑考―」〔藝林〕四の五 昭和二十八年十月

「二つの古史―古史通と古史成文―」〔神道史研究〕二の二 昭和二十九年一月

「天地のはじめ」〔神道学〕二号 昭和二十九年八月

と、本居宣長、平田篤胤、鈴木重胤等の国学者による古事記、日本書紀などの古典の解釈、理會を儒学との関連に基づいて論じた論考を堰を切ったように発表されている。⁽⁸⁾ さらに、『檀の實―鈴木重胤の研究―』⁽⁹⁾を昭和二十八年十二月に刊行され、その構成は、

第一部

鈴木重胤著述目録

鈴木重胤文章目録

鈴木重胤略年譜

第二部

神世之語事と日本書紀伝

— 古典研究の方法 —

祝詞正訓出版の事情

であり、第二部に収められている二編の論文のうち「祝詞正訓出版の事情」は、昭和二十五年六月に大阪歴史学会での発表をもとにしたもので、次の「神世之語事と日本書紀伝」は雑誌等での発表を確認できないが、この論文の内容は次のようなものである。

平田篤胤は古事記、日本書紀の伝承のなかから正しいとするものを選び出して本文を策定し「古史成文」を著している。鈴木重胤も篤胤の学問に倣い「神世之語事」で記紀をもとに独自の本文を作成するのであった。しかし、その後、宣長の「古事記伝」のように、古典を徹底的に解明し古典自身で語らせるという方法こそが国学としての正しいありかたではないのか、との大きな転換を経て「日本書紀伝」に取り組むこととなる、その事情を明らかにしたものである。

この点は、大学で記紀の研究を進めていくにあたって、「やはり国学からはひろうと思ひました。当時、国学史の概

説書は沢山出てゐました。だが、私は何となく不満でした。それは学説史、人物史に過ぎない。国学が抱えてゐる課題を取り出し、それに国学者がどう取り組んでゐるか、それをひとりひとりの深い伝記的研究を積み上げの上に論述してゆく、そういった迫力に満ちた国学史は、残念ながらほとんどないという印象を持つてゐました⁽¹⁰⁾と、当時の国学研究とは異なるあり方を模索されていたことが知られる。「神世之語事と日本書紀伝」は単に学説史を展開したものでなく、古道の真意を解き明かすという「国学が抱えてゐる課題」についての深刻な対立を論じたものであり、谷先生の目指す国学研究の方法に基づいたものであった。

この論文は、原稿用紙に換算すると約百枚となり、「卒業論文をきつちり百枚で書き終へ」た⁽¹¹⁾、との枚数と合致し、内容も「学説史」、「人物史」にとどまらない内容であり、卒業論文との密接な関係が推測される。

さらに、卒業論文は、提出後の「夏休みに二百三十余枚のものに書き改め」られたとある。『檀の實』第一部の「鈴木重胤著述目録」、「鈴木重胤略年譜」は戦前の調査のもので、その分量は原稿用紙凡そ百一、三十枚程度となり、先の卒業論文の百枚と合わせると、「二百三十余枚」近くとなる。書き改められた卒業論文「二百三十余枚」と、『檀の實』第一部と第二部の分量が合致することから、「二百三十余枚」に改稿された卒業論文は、『檀の實』の原稿となったものと考えられるのである。

三

『檀の實』刊行以前に発表された国学関係の論考として、「自然とカムナガラ」と「大國隆正と鈴木重胤」がある。前者は、孝徳天皇紀「惟神者謂隨神道亦自有神道也」の「カムナガラ」に「自然」をあてるのか、「当然」をあてるのか

について、篤胤に影響を与えた老子の思想や、宋代の儒学と真淵を始めとする国学者の議論をもとに、鈴木重胤が「当然」としたことについて考察したものである。後者は、「日本書紀伝」をめぐる平田鏝胤、大國隆正からの批難をふまえて、重胤の学問の方法論を考察したものである。このように、谷先生は鈴木重胤の学問を、真淵にさかのぼり、宣長、篤胤等とその周辺の国学者も視野に入れ、それらの学問との相違や共通点を論じられるのであった。

そして、昭和三十年代に入ってからからの国学に関する主なものとしては、

「鈴木重胤と大瀧光憲」(『神道史研究』三の六) 昭和三十年十一月

「グリム兄弟の学問―国学への反省のしかたに対する一つの示唆―」(『神道宗教』十号) 昭和三十一年三月

「鈴木重胤の宗像信仰」(『神道史研究』五の六) 昭和三十二年十一月

「古史成文と日本書紀伝―国学方法論上の一つの問題点」(『神道学』十五号) 昭和三十二年十一月

「出雲大社と鈴木重胤」(『千家尊宣先生還暦記念 神道論文集』) 昭和三十三年九月刊

と数編の論文を発表されている。神道については、国学を通しての記紀の解釈とその研究の歴史をおさえた上で、垂加神道を明らかにするという方法でもって進めておられたことから、垂加神道についての論考としては、昭和二十九年に発表された「天地のはじめ」を待たなければならなかったのである。その後、垂加神道については、

「若林強齋について二・三」(『神道史研究』四の五) 昭和三十一年九月

「若林強齋先生 神道大意(覆刻)」私家版 昭和三十一年十一月

というように論文と覆刻のそれぞれ一編を確認することができる。

そして、昭和三十三年十一月に「式年遷宮の意義」を「神道史研究」（六の六）に発表後は、昭和三十七年の「すがし」考¹⁹まで、神道に限らず国学に関しても論文というかたちでの発表は四年間ほどの空白となるのである。

四

谷先生は論文以外にも、評論、随筆を数多く発表され、先生の著作の大きな特色となっている。なかでも評論について、『石のひびき』¹⁹の「はしがき」で「道義の厳肅性と精神の威厳と純粹なもの美しさとの具体的なすがたを、私は、私なりに、心をこめて書き記した」と述べられておられるように、先生の学問を考える上で、見逃してはならないものなのである。

評論のなかで、最も古いものは、昭和二十六年四月の「ケーベルのこと」と「御目のしづく」であり、その二編を始めてとして昭和三十六年までに発表された評論は、実に九十九編を数えることができる。

それらの評論は古典、先哲、神道を始めとして教育や時務を論じたものまで見られ、さらには連載も多く、昭和三十一年から昭和三十七年の間は、毎月、あるいは隔月の間隔でもって、途切れることなく連載の評論を続けられている。昭和三十八年からは、「生活の中の神道」の連載に加え、単独の評論と再び論文を発表されることとなる。つまり、昭和三十四年から昭和三十六年の「論文空白期」は、連載での評論に専念された「評論連載期」であったのである。

連載の評論は七編を確認することができ、そのなかで神道を扱ったものとしては、

- 「出雲のこころ」（昭和三十三年から三十四年「幽蹟」、
- 「神の声・人の声」（昭和三十四年から三十七年「松葉」）
- 「生活のなかの神道」（昭和三十七年から四十年「松葉」）

が見られ、まさに「心をこめて書き記した」連載に取り組まれたのである。つまり、「論文空白期」は、連載による評論でもって、神道への思索を深めておられたのであった。なお、これらの連載の評論は、後に『石のひびき』に収められている。⁽¹⁴⁾

連載での評論で最も早い「出雲のこころ」の構成は、

- (1) 雲
- (2) すがすがし
- (3) 内はほらほら
- (4) 琴
- (5) うるはしき神
- (6) かまのはな
- (7) 五百つ鉦の鉦なお取り取らして
- (8) 手俣より漏きし子

- (9) 成れるところあり 成らざるところ有り
- (10) くえびこ
- (11) 国ゆづり
- (12) かくれたる事

出雲神話にそつてスサノオノミコトから始まり、「だいこくさま」の物語が紹介されていくなか、なかでも(1)《雲》、(2)《すがすがし》ではスサノオノミコトの「わが御心すがすがし」との言挙げを取り上げ、(9)《成れるところあり》、成らざるところ有り》ではスクナヒコナノ神と「だいこくさま」の対話におけるその発言の意味を問われるのであつた。ヤマトノオロチを退治したスサノオノミコトが、天叢雲剣を天上に献じるといふ大きな功績を挙げるには、高天原を追放され地上に降りるといふ「辛苦」を嘗めなければならなかつた。そして、大功ののち、クシナダ姫と住むべき地を得られ「すがすがし」と仰せられたことから、2《すがすがし》では、

日本人の伝統的な感覚と理性とは、さういふすがすがしさが、正しいものの心であり、純粹なもののがすがたにほかならぬと、理解してきたのである。

と、日本人の判断、行動の根底に「すがすがし」があつたとの指摘である。その「すがすがし」は、ヤマトノオロチの退治、天叢雲剣の発見、クシナダ姫との結婚などを踏まえたものであるが、高天原追放にともなう「辛苦」の体験に象徴的な意味を見出される。そして、チェンバレンの英訳古事記では、「すがすがし」を pure と訳し、*kyōka* に refreshed

と訳したが、日本語の「すがすがし」にあたる外国語は見当たらないとして、日本人のもつ感性の深さが説かれる。

また、(9)《成れるところあり、成らざるところ有り》では、スクナヒコナノ神の

成れるところ有り、成らざるところ有りといふことは、事業・人生・歴史においてつねに見られる道理である。

とされ、

この神らしい風変わりな表現のうちに、智慧をこめ、反省といましめと励ましとにされたものであつた。

というように、神学的な見解を平易に語られる。

さらに、「神の声・人の声」の連載では、「神の声」として、古事記、日本書紀、大祓詞、倭姫命世記、天照大神、八幡大菩薩などを、「人の声」では西行、北畠親房、賀茂真淵、本居宣長、鈴木重胤、橘曙覧、明治天皇などを取り上げて
ている。

例えば、大祓詞の「しなどの風の天の八重雲を吹き放つことのごとく、朝の御霧、夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふことのごとく」については、

お宮の境内にはいりますと、普通の家とはもちろん、お寺などともちがった雰囲気があります。厳肅であるが、明るく、美しく、清らかで、さはやかで、まつすぐで、といふような感じ―それを綜合して、古来日本人は、「す

がすがし」と言つてきました。そして、神道における理想の境地とは、このがすがしさを徹底したところにあるのだとも、教へられてきたのでした。

と、「がすがし」に含まれる感性を挙げられ、それは、「がすがしい光明正大の境地への限りないあこがれ」であったとされる。

さらに、古事記の「このただよへる国を、修り理め固め成せ」については、北畠親房の神皇正統記の「天地のはじめは今日をはじめとする理あり」とともに、垂加神道の「今日のさまが混沌なり開闢なり」との教へが示されるなど、先生の評論の骨子となっていたのは垂加神道であり、さらには国学であった。その点について、次節でさらに考えてみたい。

五

昭和二十九年に、垂加神道についての最初の論文である「天地のはじめ」では、古典を踏まえて哲学的な思索を試みられるなど、のちに皇學館大学で講じられることとなる「神道神学」に発展していくことを窺うことができる。

神皇正統記の「天地の初は今日を初とする理あり」を受けて、垂加神道の「混沌の伝」に「今日の状が混沌也。開闢也。天地の始は今日を以初とするとは此義也。開けても混沌、未開ても混沌と云也」とあり、同じく「混沌のはじめを守るの伝」では「混沌而含牙是也」として、混沌は単なる混、沌、ではなく牙（きざし）を含むという朱子学の重要な課題である未発と已発の議論を踏まえ、天地開闢の「靈妙不可測」という「神道の秘訣」を解明することが、神道家の議論の焦点であったと述べられる。

その点を、垂加神道では「土金の伝」で説く「土がしまつて金」になるという「ツツシミ」に、「敬」の訓にあてた山崎闇斎の見解は、「普遍の理に立脚する本ものであつた」とされた上で、次のように論じられたのであつた。

天地はツ、シミによつて流行し、造化はツ、シミによつて展開される。ツ、シミは誠である。誠は天の道である。そうして、誠ならんとするのが人の道である。したがつて、天で言えばツ、シミ、人で言えば「ツ、シム」、すなわち人はツ、シムのである。ツ、シミは自然の道、ツ、シムは当然の学というべきであらう。

この「自然」と「当然」で神道を解き明かすことができるのか否かが、国学者間の議論となり、鈴木重胤は「当然」に「カンナガラ」をあてたことを論じた後、

国学における論争にあつても、自然といふことばの解釈には混乱が見られた。しかしともかくも垂加翁とその門流とは、その表現と思索とにいまだしところはかなり有るにしても、国学とは別のかたちで、おなじやうな問題にたいする解決のいとぐちを、するどい直観と誠実とによつて提出してゐたと言つてよからう。

と述べられ、ここに垂加神道と国学の接点を見出されたのであつた。

「天地のはじめ」について、「私の神学的思索のはじめの表明」¹⁵⁾とされたのは、国学を通して垂加神道への理會をより深めていくという学問のありかたでもつて、古典に基づいた神道神学を見出されたことの表明であつたのである。そして、その後の神道についての評論でも、そういう「神学的思索」を試みられたのであつた。

さらに、評論のもう一つの特徴は、人々の暮らしのなかから神道的なものを具体的に示された点である。「生活のなかの神道」と題する連載で実際に取り上げられたのは、次の九項目であった。

- (1) 風呂
- (2) ちよつと一ぱい
- (3) 明けまして、おめでとう
- (4) 障子のほりかへ
- (5) だんらん(団欒)
- (6) 柱
- (7) 花を生ける
- (8) いたゞきます
- (9) 鏡

連載の第一回である「風呂」のなかで、

風呂といふものは、日本人にとつて、まじめな意味において、深い民族的な心の伝承にかかはるものがある。もちろん私どもは、そんな深いことをいちいち考へながら湯につかつてはなないけれども、その湯から上つてきて、ああすがすがしいと思ふとき、実は明らかに、神話以来の心の伝承の中に、自分もゐるのである。

と、「すがすがしい」という感性は、風呂に浸かるという毎日の生活のなかにも見られるもので、風呂によって「すがすがしいと思ふとき」「神話以来の心の伝承の中に、自分もある」と、日本人は生活のなかで、無意識に神道を伝えてきたのであった。この点については、昭和三十九年に発表された論文の「伝統は改変してよいのか―戦後の神道論二・三に対する意見―」¹⁶のなかで、神道の学問の構成について、次のように述べられたことで、その意味するところを知ることができる。

神道を明らかにするものは、自己の理性を信じきつた観念の論理ではない。神道の事実と伝承とに対する正しい探究である。その事実・伝承とは、第一に祭祀であり、第二に古典であり、第三に歴史である。

第一に祭祀とは宮中の祭祀、神宮の祭祀、神社の祭祀、家庭の祭祀、及び民俗的祭祀である。第二に古典とは、先ず、古事記や日本書紀のように、あるときは「神典」とさへ呼ばれる種類のもの、(中略)第三に歴史は、神道が日本国家の運命と日本国民の生活とを守りそだててきた過程を、事実を以て示してゐる。

観念ではなく、事実でもって神道を明らかにするという谷先生の立場が示されている。「日本国民の生活」の一つの例として「風呂」を取り上げ、湯から上がり「すがすがしい」と思うときその背後には、「神話以来の言葉」によって、古典、歴史を支えるものが伝えられてきたことを、「評論」によって、平易に、かつ美しい日本語で説かれたのであった。¹⁷

六

昭和二十八年から帝塚山学園の教壇に立たれることとなった谷先生は、先述のように多くの評論を精力的に手掛けられたのであった。昭和三十七年に皇學館大学が再興されると同時に、国史学科の教授として迎えられ、「思想史講読」、「思想史演習」などを担当され日本書紀を講じられている。

草創期の皇學館大学は、神道学科は設けることなく、国文学、国史学の二学科を通して神道を研究し教育するという教学の樹立を目指し、神職養成については「神職課程」を設け、神社本庁が規定する科目を開講することとなったのであった。その為に、開学した年には、はやくも「神職課程」設置のための準備に着手しており、三年後に開講となる「神道神学」の担当者として谷先生が内定している。

さらには、神職課程設置の準備と神道を基盤とする教学の確立という意図から、延喜式祝詞の輪読と合わせて研究発表を行う神道研究会という勉強会が、平田貫一学長を始めとする学内教員によって、開学の年の十月頃に発足している。谷先生は延喜式祝詞の基礎研究を担当されるとともに、十二月に「神道学の発生」、翌年六月には「神道神学の問題点」という発表をされ、「神道神学」の準備を着実に進めていかれる。

また、昭和三十七年十月の学内の史学会例会で「すがすがし考」という講演を行い、その内容を「神道史研究」に「すがすがし」考」として掲載されたのであった。この論文は、先に指摘したように谷先生が、皇學館に赴任されて神道についての最初のものであり、昭和三十三年に「式年遷宮の意義」を発表後の四年間の「論文空白期」を経て、論文の発表を再開されることとなったという、大きな意味を持つ論考である。そのことを、「退職記念講義」¹⁸で、次のように回顧されている。

私は、伊勢に赴任するまでも神道の研究にたづさわつており、その点をいさゝか認めていたゞいて、皇學館大学にお招き下さつたのかと思ひますが、神宮のおそばの大学に来て、私は、はつきり言つて、神道について何も知らなかつたといふことを身にしみて感じました。伊勢に来て、私の神道についての理解は、変化したわけではないが、格段に深くなりえたと思ひます。一から勉強し直したいと思つたことでありましたが、先ず「すがすがし考」といふ論文を書き、それを新しい出発点となしえたことは、私にとつて、実に意味の大きなことであつた思ひます。

ここで述べられている「私にとつて、実に意味の大きなことであつた思ひます」については、「皇學館大学と私の神道研究」⁽¹⁹⁾のなかで、次のように具体的に語られている。

すがすがしといふ言葉を、論文の副題に「神道的境地の表現」とありますやうに、祓(はらへ)によつて現前する清浄の境地の体験を表出したものとして、古典の中から採りだして究明を試みたものでありまして、その祓といふ問題が、私のその後の研究の一つ核となつたと思ふからであります。

と、「祓」の意義を明らかにすることで、神道の本質に迫り得ることが出来るのではないかと考えられたのである。すでに見たように、「出雲のころ」と「生活の中の神道」の連載の初回がともに、「すがすがし」と深く関わる内容であつたことから、論文「すがすがし考」執筆以前から、「すがすがし」に表される心情に注目されておられたのである。その上で、論文「すがすがし考」が「あたらしい出発点となしえた」ということについては、『神道原論』の「自序」で、

古典に即して神道の境地を掘り下げたものとして、私にとつては、一つの前進をこゝろみた記念すべき論文であった。

と、「神道の境地を掘り下げたものとして」「前進をこゝろみた」と、先生自身も強い印象でもって振り返られている。

七

本稿で言う谷先生の「論文空白期」すなわち「評論連載期」となる直前の昭和三十二年四月に発表された評論の「辛苦の二字」⁽²⁰⁾で、『日本書紀』神代巻で、スサノオノミコトが天上から追いやられた時、「辛苦」しながら出雲の国に下られ、ヤマタノオロチの尾から出た剣を天上に献じ、出雲の清地（すが）でクシイナダヒメと結婚され、「わが心、清々し」との言挙げについて、次のように説かれる。

持つて生まれた、あらがねの御性質は、この辛苦の体験によつて、日に鍛へ、月に練り、つひにその気象を変化して、宝剣出現の大功をたてるとともに、清々の境地に行きつかれた。松岡雄淵の門に学んだ谷川士清は、日本書紀通証のなかで「それ困難辛苦、つぶさにこれ嘗めずんば、すなはち清々の地、あにそれ期すべけんや。」と註してゐる。

土がしまるほどの「辛苦」が「つつしみ」であり、「敬」に通じるといふ垂加神道の解釈を、次のように紹介される。

朱子、すなはち宋の朱熹は、道徳実現の根本態度として、「敬」といふことをしきりに説いてゐるが、闇齋は、その敬をとつて、「つゝしみ」と読み、それを、神道における、人々の心がまえの基本と置いた。「つゝしみ」は、すなわち「つちしまる（土、締まる）」なのである。

神道の方で、つゝしみといふことの、形式にあらはれた、一番大切なもののひとつは、はらへ（祓）であるが、（若林）強齋は、中臣祓を講じたとき、「懦弱で祓はるゝものではない」と断言した。中臣祓のなかに、「さくなだりに、おちたぎつ、早川の瀬」といふ言葉があつて、流れのはげしく落ちたぎるものを言つたのであるが、その急湍飛流白滝のやうな気象で祓はなければ、うじついた、ぬらりとした気象では、祓つても何でもない、といふのである。

つつしみが形式にあらわれた「一番大切なもののひとつは、はらへ（祓）」であり、それには、土が締まるほどの「辛苦」がともなうものである、という垂加神道の教えを強調される。先に触れたように、その後の連載の評論である「出雲のころ」と「生活のなかの神道」の初回はともに、「すがすがし」と関連する内容であつたのは、谷先生の立脚点が自ずと示されていたのである。

そして、皇學館大学に赴任後の最初の論文で、「すがすがし」を取り上げられたのは、伊勢で「すがすがしい」神宮を日々拝するなか、「祓」といふ問題が、私のその後の研究の一つ核となつたと「皇學館大学と私の神道研究」²¹で振り返られたように、祓がもたらす「すがすがし」という境地を説明していくことで、神道の本質に迫り得ると考えられたのである。

論文「すがすがし」考」の、冒頭は

雪中の松柏、寒中の梅、元旦、門松そして日の丸、雨上がりの若葉の寺（中略）発信直前の人間魚雷回天の乗組員、二重橋をわたる参賀の人々、深い森の中に明かるく輝く玉じやりと社殿……。あそこにも、ここにも、スガスガシイものがみちわたつてゐる。

とあり、我々日本人が「すがすがしい」と感じるものを挙げ、①記紀のササノヲミコトの「すがすがし」という言挙げについて触れたのち、②播磨国風土記、出雲国風土記、常陸国風土記などの用例を詳細に検討され、③古事記を英訳したチエンバレンが「すがすがし」に当てた英語訳、そして④源氏物語で用いられた「すがすがし」へと展開されていく。この論文以前に発表された連載評論「出雲のこころ」第二回「すがすがし」（昭和三十三年九月）では、雪中の松柏、寒中の梅以下とともに、①記紀、②風土記、③チエンバレンの英訳古事記、④源氏物語に見られる「すがすがしい」を紹介しており、論文「すがすがし考」の先行的な内容となっているのである。

「出雲のこころ」のなかの「すがすがし」は、千二百字程度の評論であるが、「すがすがし」考」は、その十倍以上の一万五千字の論文である。皇學館大学に着任され、神道が本来的に持っている「すがすがし」を、神宮にて深く実感されたことで、神道への理解が「格段に深く」なられ、評論「すがすがし」を基本にして、取り組まれたのが論文「すがすがし」考」であったのである。

さて、その「すがすがし」考」の最後は、

(乙) だが、日本人にとつて、古来あのスガスガシイ境地は、日常におけるたえざる期待であり、忘れがたいあこがれであり、求めてやまない理想であつた。速須佐之男命が、「我が御心スガスガシ」と言あげられたといふ神話の意義は、実に深いのである。

と記されているが、その前段で、次のように述べられている。

(甲) 生まれ変つた気持ちで出直したい、とは日本人の好んで使ふことばである。言ひかへれば、スガスガシイところに立ちかへつて、さはやかな新しい気持ちで出直したいといふことである。そこには、仏教の輪廻とはちがふ、独自の論理の伝承がある。もとより、いかなる日本人でも、つねに生れ変わるものではない。だから同時に、祓へや禊ぎが、古儀のまゝ、に素朴に厳肅に伝へられる。生れ変りが真実のものとなりうるためには、敬虔な信仰により、まことをこめて神々の御徳を仰ぐ、きびしい体験が必要とされるであらう。垂加神道が、清々の地に至るためには、特に辛苦とつゝしみとがなければならぬと力説するゆゑは、そこにあるのだと言ふべきである。

と、「辛苦」と「つつしみ」によつて「清々の地」に到る垂加神道の教えを、この論文の結論の前段(甲)で取り上げられたのである。

この点は、評論「すがすがし」の結末を、

つ、しんで祓へを受け、白紙を取りしでた榊の枝をさ、げ、まづしい心で祈ろうとする私を……「懦弱で祓はる、ものではない」、若林強齋は、鋭く、はげしく警策する。

と、「祓へ」を「辛苦」で以つて説いた若林強齋の言葉で締めくくられており、論文「すがすがし」考」に通じるのである。

しかし、論文「すがすがし」考」は、評論「すがすがし」の内容を大きく加筆し、より詳細となったというだけのものではない。それは、谷先生自身が、「私にとつては、一つの前進をこゝろみた記念すべき論文」と回顧されたように、思索に「前進」があり、「神道的境地を掘り下げたもの」であったのである。

論文「すがすがし」考」の巻末部を二分して、その前段を（甲）、結末を（乙）として、先に引用したが、前段（甲）の最後と結末（乙）の冒頭は、「だが」という接続詞が用いられている。つまり、（甲）での垂加神道に基づく「清々の地」の理会とはやや異なる視点からの理会を（乙）の結末で述べられていることから、「だが」という接続詞が用いられたと考えるべきであろう。つまり、この論考によって「一つの前進をこゝろみた」点を、（乙）で総括されつつ、残された課題があることを意識された表現をとられたのであった。

その「前進をこゝろみた」との点は、論文「すがすがし」考」のなかで「スガスガシ」のもつはたらきに、次のように、「いのちのよみがえり」、「生命の若がえり」があることを見出されたことを指しているのである。

そもそも、泉とか井とか、そして水といふものは、二つのはたらきを期待せしめる。一つは、きたなきものの除去であり、一つはいのちのよみがへりである。

記紀、風土記を詳細に検討され、「スガ」の説話または「スガスガシ」の神話は、泉や井泉を得る伝承であるとともに祓の神話の終着点を語るものであるとの推論を踏まえて、次のように述べられたのである。

祓といひ、泉といふも、その神道的論理は、全く一つであると言つてよい。一点のけがれもとゞめない明浄正直の境地、しかも、そこには無限の元気が動いてゐるといふ、その境地の体験、それをことばに表したのが、スガスガシであらう。

神道の信仰の上からも、スガスガシといふ境地は、二つの面から考へることができるであらう。すなはちその一つは、それが祓によつて到達すべき境地を告げるものであるといふことであり、もう一つは、泉による生命の若がりへりがそこにあるといふことである。

垂加神道の若林強齋の『神道大意』⁽²²⁾で、水も火も、木にも草にもいのちがあり、不可思議にして神秘なはたらきの一つつにいのちを見出すのが神道であるとする。それを受け、論文「すがすがし考」では、神道の生命観についてさらに深められ、「祓へ」には浄化とともに、「いのちのよみがえり」に象徴される無限の元気をもたらす力があると指摘されたのである。

さきに引用した(乙)の最後に、「速須佐之男命が、「我が御心スガスガシ」と言挙げされたという神話の意義は、実に深い」と記されている。それは、引用された本居宣長の『古事記伝』の次の見解を踏まえて考えるべきであらう。

さて、来此地と、其地に係て云るは、此地に又深き所以あるべし、そは凡心には測がたし、そもそも此地は、櫛名田比売に御婚坐て、其生の御子孫、天下に大なる功績を立給ふべき始めの地なれば、此処に來坐て、御心すがくしくおぼしけむも、宜にざりける。

「スガ」の地での言挙げを、宣長の「凡心には測がたし」を引用し、「神話の意義は、実に深い」とされ、先生が今後深めていくべき方向性について強く意識されたことが窺えるのである。

八

皇學館大学に赴任された最初の論考で、「祓へ」による「スガスガシ」によつて、「いのちのよみがえり」がもたらされるという、神道の持つ生命観が提示されたのであった。そして、その七年後の「神道における「いのち」——特にその連続性について——」⁽²³⁾において、「いのちのよみがえり」は、「神道の「いのち」の信仰の中にある、連続性の思想」⁽²⁴⁾への展開がみられると、深められていったのである。

その点を考えるにあたって、谷先生は西洋の思想にも深く関心を寄せておられた点を、確認しておく必要がある。すでに「すがすがし」考」の前年には、評論「ルソーの予感」⁽²⁵⁾を発表され、フランス革命の思想的な源流であるルソーの代表的な著書『社会契約論』について、次のように批判されている。

契約といふ以上、そこには対立が前提とされてゐる。社会を成立せしめるものは契約であるといふ。一貫したい

のちに基盤を置き、敬愛・信義・感恩によつて支へられるとするわれわれの道徳意識とでは、立脚点に根本の違いがある。

ルソーの思想とは異なり、日本では社会を成り立たせているのは、「一貫したいのち」への信頼である、との指摘である。「一貫したいのち」というのは、我々のいのちの本質は神々につながる神聖なもので、若林強斎が『神道大意』のなかで、いのちは「天の神の賜物をいただき切つて、敬み守る事也」と述べていることに通じるものである。

「一貫したいのち」とは、先祖代々の「いのち」を受けたものとして、「神道における「いのち」のなかで、神話での「生む」について、次のように考察されている。

古典に伝へられてゐる日本の神話自体が、「いのち」の連続性の思想を基調にして構成されてゐる。すなはち、「生む」といふことが、神話の根本的なテーマであり、「生む」はたらきが神代史を展開せしめる基本的な力となつてゐるのが、それである。あらゆるはたらきの根源には「むすひ」の神の力がある。「むす」とは生成、「ひ」は神秘の力である。しかうして、その「むすひ」の具体的な展開は、主として、「生まれた」ものの「生む」はたらきによるのである。

結婚による「生む」によつて、いのちの広がり、つながりへと展開していくことで社会が成立していくとするのが神道の捉え方であり、ルソーの「契約」という思想とは「立脚点に根本の違い」があるのである。

「ルソーの予感」ではルソーの「社会契約論」、「告白」、「エミール」とプラトンの「国家」などが取り上げられ、何

れも「家」を否定するものとして論じられる。さらには、「神道におけるいのち」では、神道的思惟とは異なるものとして、先のルソー、プラトンをはじめとして、デカルト、カントの思想は「歴史の無視、伝統への無関心、理性による道徳の改造」であり、「いのちをつながりとひろがりのうちに見ようとす」認識がないと厳しく批判される。

「我考ふ。故に我あり。」に代表されるデカルトなどの西洋の思想は、「我」、「人間」が孤立的にとらえられ、人との「間がら」ということへの認識は低いが、神道の持つ「いのち」の連続性という観点から神道の結婚観を、次のように示される。

性といふものは、神秘なものである。その性の結合、それは神聖なものである。それは、二つの「いのち」が一つになることである。そして、その二つの「いのち」のそれぞれには、悠久の「いのち」の伝承がある。父母の「いのち」、祖父母の「いのち」、祖先の「いのち」、そして神々に通ふ「いのち」がそこに存在する。

この二つの「いのち」は、それぞれに先祖代々の「いのち」をうけながら、それぞれにひろがりを持つてゐる。そして、そのひろがりの中で、二つの「いのち」の系譜は、また連続しあつてゐるのである。さういふ「いのち」の二つがひき合つて結合し、そこに新しい「いのち」を誕生せしめるのが、結婚である。無限のひろがりには、このとき一つに集中し、また無限にひろがつてゆかうとする。

そして、結婚による「いのち」の無限のひろがりには、その信仰のあらわれとして、

一家々々の祖霊の祭祀となり、一族・一町・一村の氏神・産土神の祭祀となり、また多くの神々の、そして神宮を大御親と仰ぐ国家的信仰まで結晶してゆく。

というように、神道の「いのち」の連続性は、国家的信仰にまで展開されるものであり、そういうつながりとひろがり
が歴史となり、さらには倫理として高まっていくことを、次のように説かれたのである。

一つ一つの「いのち」の個性の上では、それらは一つのものとして重なりあつてゐるのであるが、その歴史性と倫理性とは、歴史や倫理に対してむしろ対決的姿勢を本来とする信仰の少くない中で、伝統的性格・公共的性格を、神道において特にきは立たせる大きな理由となつてゐる。

「神道における「いのち」は、後に二節分が追加されたうえで、『神道原論』の後篇第三章「いのち」という同書の最後の章となっている。「祓へ」がもたらす「すがすがし」と、神道の持つ「いのち」の連続性は、谷先生の「神道神学」の柱をなすものなのである。⁽²⁶⁾

九

『神道原論』序説第一章「神道の課題」の「一、神道と神道指令」で、昭和二十年十二月十五日の「神道指令」は、明治以降の神道体制を打破したものとするGHQ高官の発言に対して、「建国以来の神道のあり方、言いかえれば、日

本立国の精神的基盤を、根本から否定した」ものとして強く否定される。

続いて、「二、神道の苦悩と努力」では、GHQの占領体制のもとで神道を護るために神社本庁が昭和二十一年二月に結成され、「神道指令」によって神宮皇學館大学が廢学となったことで、神道を研究・教育する唯一の大学となった國學院大學を中心として、昭和二十二年十一月に神道宗教学会の発足をみたことについて、次のように紹介される。

『神道宗教』創刊号の折口信夫の「発刊のことば」に「目下在来の倫理神道と別れて、宗教神道の地固めに勤しんでゐる我々の作業は、記念すべき労苦として、必後世からは見られることになるでせう」とある。(中略)

この創刊号に、宇野円空・小口偉一・堀一郎の論稿、しかも研究法に関するものを並べたのは、きはめて印象的であり、また実際に、すこぶる意図的であつたと思はれる。すなはち、折口の言う「宗教神道の地固め」とは、学問の分野で具体的に言へば、宗教学と民俗学とを採り入れることであつた。

なかでも、折口信夫の「在来の倫理神道と別れて、宗教神道の地固め」については、谷先生は「伝統は改変してよいのか」のなかで、折口の「民族教より人類教へ」に触れて、次のように述べられている点が注目される。

倫理神道から宗教神道へとか、民族教より人類教へとか言はれるとき、そしてまた、これまでの神道が眞の宗教とならなかつたのは多くの障壁があつたからだとして、特に「我々自身が神道を宗教として認めなかつた」といふ点と共に、「神道と宮廷との関係非常に強かつた」点を指摘されるとき、私はどうしても、氏の悲願に同感しえないのを遺憾とする。

「神道における「いのち」」で、「神宮を大御親と仰ぐ国家的信仰」という「伝統的性格・公共的性格」は、神道を特
にきわ立たせる特色であるとの立場から、先の「伝統は改変してよいのか」で、折口論文について、次のように異論を
呈されていたのであった。

宗教的心情と倫理的心情、宗教と国家を、截然と区別するのは、西洋近代の立場である。その立場は、西洋史の
血みどろの現実によって生み出された。それは、ややもすれば無条件の前提となりやすい。だが、むしろその立場
との真剣な対決こそ、神道の直面する課題の一つではあるまいか。折口氏の「宗教神道」の主張のうらには、国学
以来の儒教批判の伝統的心情が流れてゐるのかも知れないけれども、くりかへしていふならば、あまりにもその趣
旨は楽天的である。

この引用箇所は、『神道原論』の序説である「神道の課題」でもほぼ同じ文章を確認することができることから、「神
道の課題」は、「伝統は改変してよいのか」の問題意識をもとに、新たに書き下ろされたものであった。

わが国の歴史のなかに倫理を見出す視点が、谷先生の「神道神学」である。先生は垂加神道や国学を基軸にして、哲
学的な思索をめぐらすだけではなく、人々の日々の暮らしのなかから神道的な心情を見出され、連載の評論「生活の中
の神道」で、折口氏の民俗学とは異なる関心から、伝統に立脚した生活心情を分析されたのである。

さらに「神道の課題」のなかの「三、現代神道の課題」で、

神道は、教祖とバイブルをドグマとを持たぬが故に、容易に近代化・現代化または「宗教化」が考へられようとする。われわれは、現代のまつたゞ中に生きてゐる。その故にわれわれは苦悩する。だが、われわれの課題は、日本的デモクラシーといふやうな名のもとに、神道ないしは神道的思想を、どのようにうまく解釈し、説明しようかといふやうなことでは決してない。

と、谷先生の「神道神学」の拠つて立つ立場を明確に示され、『神道原論』序説で見られるこれらの問題意識は、同書を貫く視点であつたのである。

本論の冒頭部で確認したように、『神道原論』を構成する基本となつた論考のうち、最も早いものは「すがすがし」考」であり、次は垂加神道に関わる「日之少宮の伝の論理」である。そして、三番目となるのが「伝統は改変してよいのか」であり、それらを含めて、その後の六編の論考が『神道原論』を構成する論文となつている。「伝統は改変してよいのか」以後の六編の論考では、教祖、バイブル、ドグマを持たない神道の苦悩と常に向き合われたのであつた。

十

「すがすがし」考」の巻末において、谷先生は「神話の意義は、実に深い」と記され、その意義については、宣長の「凡心には測がたし」とする『古事記伝』の箇所を引用されたのであつた。スサノオノミコトがクシイナダ姫と結婚する須賀の地について、宣長は「其生の御子孫、天下に大なる功績を立給ふべき始めの地」と「神道神学」に通じる理會を示している。垂加神道では、その地での「わが御心、すがすがし」との言挙げが意味するところを、「辛苦」と関連

させ、倫理的、さらには求道的とも言える解釈へと深めており、谷先生は深い影響を受けられたのである。

結婚は新しいのちの誕生を導き、それは生命のよみがえりであり、いのちの無限の広がりへと展開していくことから、それが神道のもつ国家性、公共性を支えるものとなることに、谷先生は着目されたのであった。『神道原論』を構成する論文のなかで、最初に位置する「すがすがし考」で明らかとなった課題を、同書の各章の基本となる論考でもって、神道の国家性、公共性を論証し、それらを受けて、「神道における「いのち」をもとに加筆された最終章「いのち」で、ドグマを排して、古典、歴史に基づく神道の倫理性を確信をもつて示されたのである。²⁷⁾

註

(1) 皇學館大学出版部・昭和四十六年六月刊。

(2) 平成七年七月三十日『谷省吾先生退職記念神道学論文集』献呈式での謝辞。

『神道・自然・皇學館』（谷省吾先生退職記念神道学論文集編集委員会・平成八年四月刊）に「皇學館大学での私の神道研究」として収録。

『神道 その探求への歩み』（国書刊行会・平成九年六月刊）に「皇學館大学と私の神道研究」と改題の上収録。

(3) 國學院大學で「神道神学」を担当された小野祖教博士、安津素彦博士は、ともに同大道義学科の出身であり、戦前期より國學院大學等で神道学の研究に専門的にあたられた研究者である。谷先生は、大学では国史学を専攻され、思想史を基盤にしつつ神道の探求を深められた。

(4) 前掲(2)。

(5) 『垂加神道の成立と展開』（国書刊行会・平成十三年五月刊）自序。

(6) 平成六年一月二十日 退職記念講義。

『思想史の探究』『皇學館論叢』二十七の一 平成六年二月。

『思想史の探究』（皇學館大学講演叢書第七十四輯 平成六年三月刊）。

『神道 その探求への歩み』（国書刊行会・平成九年六月刊）に「私の立場と方法」として所収。

(7) 同右。

(8) 当時の国学研究の状況について、三枝康高『国学の運動』（風間書房・昭和四十一年二月刊）の「あとがき」に「敗戦の日を迎えて（中略）古典を顧みるものとしてなく、いわんや国学のごときものはまったく捨てられ、忘れられて、学界もまた混乱と頽廢の渦中にあつた。」と記している。

(9) 私家版。

(10) 前掲(6)に同じ。

(11) 「学問における完成と未完成」「日本」昭和六十二年八月号。『門松に祈る』（古川書店・平成元年四月刊）に所収。

(12) 同右。

(13) 初版（日本教育協議会・昭和三十七年四月刊）。

増訂再版（皇學館大学出版部・昭和四十四年四月刊）。

(14) 「生活のなかの神道」は増訂再版に所収。

(15) 前掲(5)に同じ。

(16) この論文によって、「私は、私の立場・主張をはつきりさせなければならぬと強く自覚しましたのは当然ですが、私を見る人々の眼が、皇學館の見解といふ意識で見えてをられると、ひしひしと感ぜられて、これは容易ならぬことだと思つたことでもあります。」
「皇學館大学と私の神道研究」と回顧されている。

(17) 若林強齋の「神道大意」に「惣じて神道を語るは、ひらたうやすらかにいふがよきなり。忌部正通の辞を嬰児に借りて心を神聖にもとむといへるが是なり。」とある。

(18) 前掲(6)に同じ。

(19) 前掲(2)に同じ。

(20) 「日本」七の四 昭和三十二年四月。

(21) 前掲(2)に同じ。

(22) 谷先生による若林強齋の「神道大意」の翻刻と解説が、左記のように住吉大社の社報に連載されている。

『神道大意』講義 「すみのえ」 百二十二～百十六号 昭和四十八年四月～八月

(23) 『高原先生喜寿記念 皇學論集』(皇學館大学出版部・昭和四十四年十月刊)。

(24) 『神道原論』後篇 第三章いのち 二、「いのち」の連続性。

(25) 「日本」十一の十 昭和三十六年十月。

(26) 前掲(5)の「私の立場と方法」で、「私の課題」として、(一)「いのち」、(二)「祓と正直」という節を立てられている。なお、谷先生は、「神道神学」の基盤に、「祓の倫理化」としての「正直」を据えておられた。

(27) 「すがすがし考」で最後に記された「速須佐之男命が、「我が御心スガスガシ」と言あげされたといふ神話の意義は、実に深いのである。」は、『神道原論』では削除されている。

本稿を成すにあたって、『谷省吾先生著述目録』(皇學館大学大学院倉史會・平成三年十月十九日刊)を参照にした。

